日小整会誌（J Jpn Ped Orthop Ass）18(2)：264, 2009.
第19回日本小児整形外科学会学術集会　パネルディスカッション2

RB治療の標準化に向けて

座長：扇　谷　浩　文・伊　部　茂　晴

近年，先天性股関節脱臼は少子化や予防活動の効果により，発症例は少なく一般の整形外科医がその治療に携わる機会は激減している．一方でRB装具についてはその治療効果は優れてはいるものの決して安全なものではなく，AVNの合併症なども起こりうる．しかし小児整形外科を専門とする医師に紹介されてくる例の中には整復されないばかりか，むしろAVNなどの危険を高めてしまうような不適切なRBの装着がされていることも稀ではない．こうした現状に危惧感を持ち今回のシンポジウムが企画された．ただ，その目的は治療法の画一化ではなく，合併症の危険を低くするための標準的装着法を検討することである．

講演では，はじめに和田郁雄先生が日本小児股関節研究会で行ったRBの装着についてのアンケート結果を発表された．先天股脱に経験の深い医師間にもその装着法に違いがあることが述べられた．服部義先生はX線だけではRBを装着すべきか悩む症例に対し超音波診断を併用することで判断をより的確にでき，装着例を減らすことが可能であると述べられた．北野利夫先生はRBを整復に用いることに危険があると考え，他の方法で整復の上RBをその維持のためだけに用いた結果について報告をされた．フロアからはRBの使い方を誤らなければ整復に用いてもAVNの危険はそれほど高いものではないとの意見が相次いだ．浦野典子先生，鬼頭浩史先生はRB治療後の経過について報告され，経過不良例，特にペルテス変化については高位脱臼例にその危険が高いこと，変形の強い例では早めの補正手術により求心性を得ておくことが大切であることが述べられた．

ディスカッションではアンケート結果をふまえ，標準的なRBの開始時期や装着期間，入浴の許可時期，整復されない際の待機期間，AVNの予防対策，そして装着を避けた方がよい例などを中心に討論した．今後，これらの結果をもとに和田先生を中心とするグループでマニュアルに仕上げる計画があることが示され，会場の諸先生方に協力が要請された．

（文責：伊部茂晴）